



進取の精神

大隈重信

大隈重信は、早稲田大学（旧・東京専門学校）の創立者です。一八三八年三月十一日、佐賀県で武士の子どもとして生まれました。

重信は七歳で藩の学校 弘道館に入学し、大変な勉強家でした。彼は、何でも新しいことに興味をもち、勉強も当時の最先端のことに挑戦していました。このチャレンジ精神が、大人になつてさまざまな分野で活躍する基礎になっていきました。彼は、佐賀の特色『葉隠』による儒教教育を受けました。ところが勉強をするにつれて、「藩校で教えていることは古い」と感じました。「いかに世界が広くても、佐賀藩より貴重なものはほかにないように教えている」と批判的に解釈しました。

彼は十七歳のとき、弘道館の教えを嫌って同志たちと、南北騒動^④という事件を起こしました。議論好きの大隈は騒動の首謀者とみなされ、退学処分を受け、弘道館をやめさせられてしまいました。しかし間違いと分かり、すぐ復学が許されましたが、彼は戻らずに「蘭学寮」へ転入しました。彼は、「これからの日本は、アメリカやヨーロッパの学問を勉強する必要があるだ」と考え、西洋の学問を学び始めました。まずオランダ語を学んだあと、英語や近代的な学問を勉強しました。

④「南北騒動」とは一八五五（安政二）年六月、弘道館の内生寮（現在の高校・大学に相当）で起きた事件です。内生寮の授業は旧態依然のまま。ひたすらに四書五経を読み、儒学を学ぶばかりでした。そのことにあきたらない学生たちが改革を唱え始め、儒学に熱心な学生たちと対立しました。やがて寮の南北に分かれての大議論に発展し、入り乱れて殴り合う事態になりました。（）

重信は、キリスト教を伝えながら若者たちに英語や洋学を教えていたフルベツキと長崎で出会い、大きな影響を受けました。彼はフルベツキの塾で、新約聖書やアメリカ独立宣言を知りました。重信は憲法などを熱心に勉強し、秀才ぶりを発揮しました。

彼は二七歳のとき、長崎でフルベツキを校長先生として英学塾「到遠館」をつくりました。そこでは、副島種臣と大隈重信が教頭格となり、彼は英語などを教えました。が、「人に教える」という体験からさまざまなことを学びました。これがきっかけとなり、将来、大学をつくることになっていくのでした。

重信は、当時の日本にとって教育が最も大切だと考えていました。そして、「すべての人が自由に勉強できなければならない」と考えました。彼は、一八八二（明治十五）年十月二一日、新しいことにチャレンジする若者たちが自由に学べる早稲田大学（旧・東京専門学校）を創りました。早大の最も大切な精神の一つは「学問の独立」です。これは、だれもが自由に何でも学べるようにすることです。早大で学んだ人達は、チャレンジ精神（進取の精神）を忘れず、日本中や世界で活躍しています。

彼は、早稲田大学を創っただけではなく、他の大学をつくる人たちも助けました。例えば、新島襄^⑤から同志社大学をつくりたいと相談されたとき「新島君が大学をつくるのを助けてあげよう」といって、多くの寄付を集めました。

⑤また、重信は、「女性も勉強して、社会で活躍すべきだ」と考えていました。そこで、成瀬^{なるせ}仁蔵が日本女子大学を創ろうとしたときは、創設委員長になって助けました。（まわりの人は、「日

本女子大学ばかりに熱心なので、早稲田大学のことを忘れてしまったのではないかと心配したほどです。ちなみに、早大は私学の総合大学として初めて女性（四名）が入学した学校です。）

ところで早大のライバルは、慶応義塾大学です。この慶大を創った福沢諭吉と重信はとも仲良しでした。重信は諭吉の考え方は素晴らしいと考え、諭吉に勉強を教えてもらった学生を政府の役人として登用しました。諭吉がなくなるとき、重信は涙を流しながら、自分が大切に育てた花を切り花束を届けさせました。

重信は、新しい郵便を始めました。彼は、新しい国づくりには、手紙や葉書などの情報により早く安く運ぶことが大切だと考えました。そこで、アメリカの郵便制度に詳しい前島密（ひそか）に日本の新しい郵便制度を考えるように言いました。密は自分から進んでこの仕事を行い、完成させました。密は「郵便の父」と言われていますが、その後「東京専門学校」（早大）の二代目校長になった人です。

白瀬轟（のぶ）は日本で初めて南極大陸を探検しました。探検隊が南極に行くための費用を集めて助けたのが重信でした。探検隊は最初は南極大陸に上陸できませんでしたが、重信は電報で励ましました。そのかいがあつて、二度目で上陸を果たしました。白瀬は重信の励ましなどに感謝して、南極の入江の一つを「大隈湾」と名付けました。今もその名が使われています。

不屈の闘士だった重信は、「私は失敗ばかりしてきた。人は必ず失敗する。成功より失敗の方が多し。でも失敗に悩んだりしてはいかない。失敗することで、大切な事が分かる。そのことが成功につながるのである」と、若者たちに言っています。

さて、重信の**最大の趣味は、座談**を楽しむことでした。彼の自宅には毎日のように沢山の客が詰めかけてきました。その数は二十から三十を下らず、ときには五十人、七十人に達することもあったそうです。重信はこの多数の客を心から歓迎し、**座談**を楽しみました。雨の日など客が少ないと、「今日は入りが少ない」と言っただけです。彼の座談はとても元気に満ちあふれ、お客さんから出される質問に対して、しばしばこぶしをふり上げゼスチュアを交え、あふれんばかりの知識を傾けて語り、何時間でも疲れを知らなかったそうです。彼の鋭い頭脳は、座談の間にお客から豊富な知識を吸収しました。それがまた次の座談に生かされ、大勢のお客を喜ばせ、納得させることになりました。

ところで重信は、母のことをこう話しています。「わたしの母は、大変人を愛し、お客さんが家に来ることが好きだった。友だちが家に遊びに来るのも大変喜んで、手料理をごちそうしてくれた」彼自身がお客さんを好きなのは、母の影響があったからでしょう。

さらに、「母は珍しいほど、度量が広く、寛大な人であった。人の過失を責めず、人の罪をとがめなかった。私は叱られたことはほとんどない。（中略）私は楽天主家だと言われるが、それは多く母の感化であった」といっています。事実、重信も怒らない人として知られていました。人である以上、どんなときでも怒らずにすませるわけにはいきません。しかし、重信が怒ったのを見た人はだれもいませんでした。彼が暴漢に襲われて、右足の約三分の一を失ったときさえ、「狂気ではあるが、憎くはない」と言っただけでした。しかも自害した犯人の遺族に香典を贈り、その霊前で追悼演説も行ったのです。

残念なことに重信は、一九二二年一月十日、満八三歳で亡くなりました。第八代と第十七代内閣総理大臣を務めた重信のお葬式は、「国民葬」として行われました。一五〇万の人たちが彼を見送りました。重信がいかに大勢の国民に慕われていたかが分かります。

「わたしたちは、大隈重信の生涯から何を学べるか？」

一つめは、チャレンジ精神・向学心です。なんでも進んで受け止める大変な勉強家でした。二つめは、失敗に負けない強い意志です。あきらめない強い意志・精神力をもっていました。三つめは、人間愛です。大勢の人のために尽くしました。

◎ 子供たちに重信の話をして、これらの力を身に付けられるよう、少しずつ学ぶことの大切さを話していただけると幸いです。



参考資料

大隈重信の言葉

○ 「高く飛べんと欲すれば、深く学ばざるべからず。」

○ 「最愚者の為す所が最賢者の頭脳を支配することもある。世に無価値な人間があるべき理はない。」

○ 「幾多の失敗を重ねたが、しかし恐縮はせぬ。失敗はわが師なり、失敗はわが大なる進歩の一部なり。」

○ 「人間が生きてるのは、社会の利益のために存在すると云うことだ。ただ生きているのではつまらない。」

(1) 怒るな

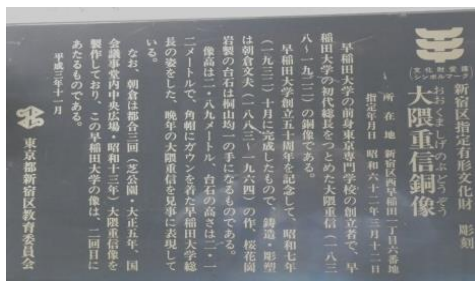
(2) 愚痴をこぼすな

(3) 過去を顧みるな

(4) 望を将来に置け

(5) 人のために善をなせ

○ 「人間は死ぬるまで活動しなければならぬ。」



大隈重信の銅像

大学正門から見える像の後ろ側には新宿区教育委員会の説明板がある



大隈は、当時の日本人の平均身長からすると、長身のほうでした。そのため洋服もよく似合いました。



大隈は、稀代の演説家でした。

大隈重信 名言集・格言集、名言名句、座右の銘、次代への名言
『エピソード 大隈重信』 「図録 大隈重信 近代日本の設計者（早稲田大学編）」ほか

〈出典・参考文献〉
木は蘇生する」

○「希望そのものは人間の生命である。」
○「要するにわが輩は藩閥以外の遊星であった。」
○「若い人は高尚な理想を持たなければならない。そしてそれを行う勇氣がなければならない。」
○「施して報を願わず、受けて恩を忘れず。」
○「学問は脳、仕事は腕、身を動かすは足である。しかし、卑しくも大成を期せんには、先ずこれらすべてを統(す)ぶる意志の大いなる力がある、これは勇氣である。」
○「諸君は必ず失敗する。成功があるかもしれないませぬけど、成功より失敗が多い。失敗に落胆しなされるな。失敗に打ち勝たねばならぬ。」

○「わが輩は楽観説である。人生を重んじて、常に未来に光明を望んで行くのである。」

○「道が窮(きわま)ったかのようで他に道があるのは世の常である。時のある限り、人のある限り、道が窮(きわま)るといふ理由はないのである。」

○「枝葉を切っても木は蘇(す)らない。根元を掘って自然の力、太陽光を根にあてて水を注げば、木は蘇(す)生する」